

## 保育者アイデンティティの形成に関する研究 －実習生教育と現職教育の連続性－

### 「実習生に見る反省的実践の検証」

小泉裕子 (児童学科・助教授)  
田爪宏二 (子ども心理学科・講師)  
Satomi Izumi Taylor (University of Memphis)

#### 【研究の背景】

かつて幼児期の教育・保育は主として家庭の仕事であり私事であると捉えられていたが、現在は時代の変容と共に保育者の資質向上が求められ、高度な保育の専門職として社会的に期待されつつある。本学における保育者養成の方針や内容も高度な専門職としての視点から検討を加えることが急務である。

高度な専門職としての保育者とは、どのような専門的力量を携える人材であるのか。佐藤(1997)は教師の専門的力量とは何かの問いに対し、「それ自体アポリアである」としながらも、次の2つの概念を導き出している。一つは、教職に関連する理論、原理、技術を習得する「技術的熟達者」であり、現在の多くの教師養成大学で行われている教師教育の制度、内容、方法はこのモデルを想定し構築されているものであるとしている。また、もう一つのモデルは教職の専門的力量として問題解決に主体的に関与して子どもと生きた関係を結び、省察と熟考により問題を表象し解決策を選択・判断する実践的見識に求める「反省的実践家」であると示している。さらに佐藤は、我が国の教師教育のカリキュラムが「反省的実践家」モデルを中核として位置付くことを推奨し、現職教育と養成教育の連続性の構築の重要性を示唆している。

#### 【研究の目的】

筆者らは、養成段階における高度な専門的力量の育成を目的としながら、養成教育の課題と現職教育の課題の接点、あるいは連続性について検討していきたい。

前掲した「反省的実践」とは、専門的知識に裏付けられた適正な保育観にもとづき保育を捉える力をもつことや、自分が向き合い保育実践を振り返る思考を身につける行為であり、理論的には把握しきれない多様で複雑な実践を捉える知と定義される。このような反省的実践家モデルの形成を、養成段階から意識的に内在化することで、現職教育への連続性が果たされるのではないかと考えた。

また、現職教育との連続性を検証するに当たって、筆者らはライフサイクルにおける保育者のアイデンティティの形成に注目した。

保育者のアイデンティティは、保育者として期待され、そこで関わる人々によって作られる「me」と、そこから主体として感じられる「I」により生成される(秋田2001)。保育者のアイデンティティに関する研究の多くは、現職の初任期からスタートしているが、筆者らは保育者

のアイデンティティの発達には実習段階から既に始まっていると仮定する。

そこで、本研究では実習生の段階から形成される「保育者アイデンティティ」の実態を捉える事を主軸に据え、その研究内容を次の2段階に分けて検討することとした。

初年度は、本学の保育実習、幼稚園実習の実習生が、高度な専門性としての反省的実践家モデルを体得するための授業（模擬保育演習）の効果検証を行い、実習生が獲得する保育者アイデンティティの実態を把握する。次年度は、実習生の保育者アイデンティティを支える現職者の役割について実態を調査し、メンタリングのあり方や課題を追求していく。

### 【17年度研究成果】

小泉・田爪（2005）において、保育者志望の学生が“保育者である自分と向き合い、保育者である自己を自覚し成長するプロセス”を「実習生の保育者アイデンティティの確立（萌芽期）」と捉えることを提案した。実習生の段階から「保育者のアイデンティティ」を形成することは、保育者を目指す学生の発達課題である。そのアイデンティティ形成の最も大きな契機は、教育・保育実習である。

では養成校のカリキュラムに位置付く他の科目はその契機となりえないのであろうか。現在養成校においてこの問題を克服するために、より効果的な講義やカリキュラムの検討、実践的な取り組みがなされている。たとえば、入江・安村・小泉・内藤（2002）では、幼稚園教諭の総合的役割を認識するため、現場との連携した実地研究の充実を協調した保育者養成カリキュラムを提案している。さらには幼児や幼稚園教諭の役割、実態を理解するための授業におけるビデオ伝達が、学生の現場に対する肯定的なイメージを高める効果があることを見いだしている（岩立・竹田2001）研究もある。また、小泉（1999）では、様々なスタイルの模擬保育-保育ワークショップと命名-が、実習参加への動機を高め、自己課題を創出する効果のあることを見いだしてきた。

そこで、本研究では実習生の保育職への意欲を高め、保育者の専門的力量を形成する授業法として、「模擬保育=保育ワークショップ」をとりあげる。「模擬保育」という授業は、現在養成校で様々な科目で実践されており、その内容および方法を特定することは不可能である。本研究で実行した「模擬保育=保育ワークショップ」は、前掲の「反省的実践家モデル」を形成するための模擬保育であり、幼児達の歌を教える場面や遊びを指導する場面を想定し「技術的熟達者モデル」の形成を目的とするシミュレーションとは異なることを特記しておく。複雑で予想できない文脈にある保育現場に立つことを想定し、ある保育場面を再現しながら保育者の様々な役割を即興的に学ぶ方法であり、保育者と幼児役が存在することを前提とした模擬保育である。

### 1. 平成17年度研究の目的

筆者らは、実習生の保育者アイデンティティの形成モデルをFigure 1の様に仮定した。この形成モデルは、本学の保育実習・幼稚園実習の実習生が、高度な専門性としての反省的実践家モデルを体得するための授業（模擬保育演習）を受講し何らかの成果-たとえば実習に参加する意欲へと連続的につながっていく、等-を上げることを前提としている。模擬保育を実践する中で、反省的実践を行い保育者としての自己と向き合いながらその能力を自己評価し、自信と不安を内在化するプロセスの中で、実習生としての保育者アイデンティティが育成される実態やその様態（Figure 1における保育者アイデンティティの確立・拡散I期）を検証していく。

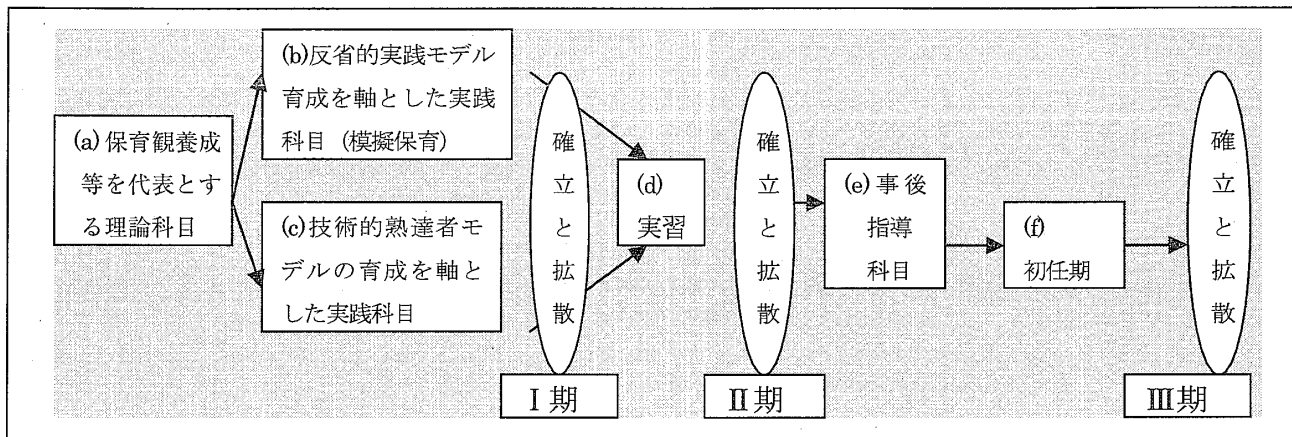


Figure1 : 初期保育者の保育者アイデンティティの発達・形成モデル

## 2. 研究の方法

今年度の研究は、反省的実践家モデル養成を主軸とし、実習生の保育者アイデンティティ(萌芽期)を形成するための養成校の授業実践そのものを、研究の方法として使用している。授業効果の妥当性については改めて別の機会に検討しなければならないが、模擬保育という仮想モデルを体験する中で、実践の複雑生や予測できない保育者の役割、子どもの実態を認識するには効果的な方法があると定義し、これを研究の第一の手続きとする。

(1) 模擬保育 (Figure 1 ではbを指す) の指導経過

- ①初等教育学科1年「保育内容研究環境」の学生を対象に、模擬保育演習を指導する。
- ②講義者は、保育を専門とする女性教員 (幼稚園教諭歴12年、保育者養成歴8年)
- ③実施時期は平成16年10月から17年1月。この時期は、初等教育学科1年の学生が保育実習に参加する直前の授業として位置付く。
- ④授業内容のシラバス
  - ・ 模擬保育の役割 (学習の意義) の理解
  - ・ 模擬保育の方法、ロールプレイング法 (保育者役2名と幼児役6~8名、再現時間20分など) の理解
  - ・ 模擬保育の準備 (7つの場面の中から再現場面を決定、指導計画の作成、実際は即興による役割演技に努めるよう指導など)
  - ・ 模擬保育の再現終了後に、再現者による反省事項の発表と、授業者からのアドバイスを受け反省的実践を行う。
- ⑤授業者の役割は、実習生の反省的実践家モデルを育成するためのメンターとしての役割を担い、実践における専門的評価を行い、実習生自らの省察を促す。

(2) 保育者アイデンティティの形成に関する成果を質問紙調査で検証

①質問紙調査の概要

- ・ 模擬保育に参加した学生を対象に、模擬保育を通して学んだ感想および学習の成果を含む質問紙調査を実施し、結果を統計分析した。
- ・ 回答数は232名であった。
- ・ 質問項目は、(Q1) 模擬保育を行った感想、(Q2) 保育に対する態度認識、(Q3) 模擬保育の

保育後の保育者観、保育観の変化、(Q4) 模擬保育に対する自己評価、(Q5) 模擬保育において想定した保育者像、(Q6) 模擬保育における不安内容についてである。

### 3. 結果と考察

#### ①保育者アイデンティティの確立群と拡散群の定義

模擬保育に関する感想のQ1項目(5件法、15項目)を主因子法、バリマックス回転解法による因子分析を行った。ここでは「保育職志望因子」「保育に対する自信獲得因子」「模擬保育実践の楽しさ因子」「模擬保育の大変さ因子」の4つが抽出された。このうち、「保育職志望」と「自信獲得」との因子得点が、共に+0.5SD以上の者を保育者アイデンティティの「確立群(n=44)」、共に平均値-0.5SD以下の者を「拡散群(n=25)」とした。

#### ②模擬保育において想定した保育者像

保育者像を示す30の項目に対し、実際に想定した程度を5件法で質問し、因子分析した。その結果、「活動性のある保育者因子」「リーダーシップのある保育者因子」「安定性のある保育者因子」「子ども中心の保育者因子」の4つが抽出された。

#### ③総合考察

各質問項目について、保育者アイデンティティの確立群及び拡散群を比較した結果をFigure 2に示す。この結果から、確立群の学生は、模擬保育において保育現場の大変さを実感しながらも、同時に楽しいと感じたり、また演じる保育者像が明確であり、実践に対するポジティブイメージのあることが分かった。一方、拡散群においては、保育の大変さばかりを意識し、楽しむことが出来ず、明確な保育者像が構築されないケースの多いことや、自信を持って演じることが出来ない。また実践の評価が低く、保育に対する不安が高い上に、克服しようとする意欲が低いという特徴のあることがわかった。本研究結果の詳細は鎌倉女子大学研究紀要第13号にて詳細に掲載することとする。

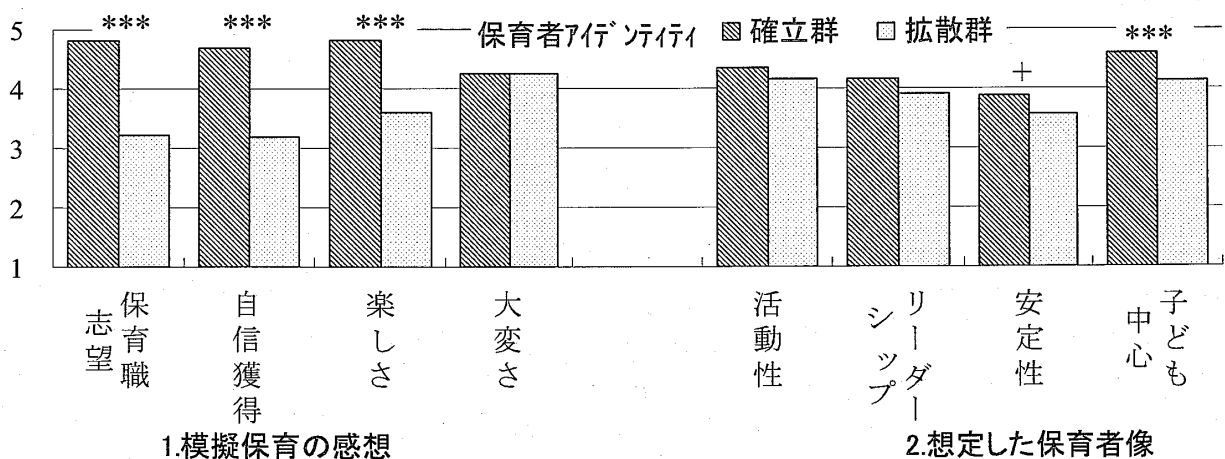


Figure2: 各質問項目における保育者アイデンティティ確立群と拡散群との比較

\*\*\*.. $p < .001$ , \*\*.. $p < .01$ , +.. $p < .10$

#### ④今後の研究課題

以上のように、模擬保育で想定している保育者像は、主に幼い頃の保育者のイメージや見学実習で学んだイメージに限定されており、演じる際のイメージが漠然としていることが明らかになったことも事実である。その中で、アイデンティティ確立傾向群は、比較的イメージが明

らかであったことは今後の研究に大きな示唆を与えるものとなった。

即ち実習生が実習前にその動機を高め不安なく参加するためには、演じる（実習する）保育者像が明確でなければ、実際の実習にも自信が持てないということである。このことを踏まえると、拡散群を中心に実習に不安を抱える学生への指導・援助には、実際の実習のイメージをより明確に定着させる情報を与えることと、自分が演じる（実習する）肯定的イメージを与えることの重要性が見えてくる。また、実習の不安を、安心して転換するメンタリングの重要性も見えてきた。この研究では、メンターは授業者1人にすぎず、実習生の個々の不安を解消するメンタリングには至らなかった。次年度の研究においては、実習生の保育者アイデンティティを形成するプロセスの中での実習先指導者（メンタリング）の実態および効果について連続して検証していく計画である。

本研究は、鎌倉女子大学学術研究所助成研究「保育者アイデンティティの形成に関する研究—実習生に見る反省的実践の検証から—」の平成17年度中間報告である。

#### 【参考文献】

- 佐藤学：「教師というアポリア」世織書房，1997
- 浅田匡・生田孝至・藤岡完治：「成長する教師」，金子書房，1998
- Karen Vandar Ven: Pathway to Professional Effectiveness for Early Childhood Educators, 1988
- 高濱裕子：「保育者としての成長プロセス」風間書房，2001
- 小田豊他：「保育者論」，光生館，2001
- 秋田喜代美：「保育者のライフステージと危機」，発達83，ミネルヴァ書房，2000
- 入江・安村・小泉・内藤：「保育現場の実態をふまえた保育内容の指導法に関する総合的なカリキュラムの構築及びシラバスの立案」，平成12.13年度文部科学省委嘱事業，2002
- 松平信久：「保育者の成長と専門性」，発達83，ミネルヴァ書房，2000
- 小泉裕子：「保育ワークショップ指導の効果」鎌倉女子大学紀要第6号，1999
- 岩立京子・竹田小百合：「幼児や幼稚園教員に対するイメージの変容に及ぼす幼児教育心理学の授業の効果」，保育学研究，2001
- 小泉裕子・田爪宏二：「実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究」，鎌倉女子大学紀要第12号，2005
- 田爪宏二・小泉裕子：「保育者志望学生の『保育者アイデンティティ』確立における模擬保育実践の効果に関する検討」，鎌倉女子大学紀要第13号，2006